

埼玉県立川越高等学校
創立百周年記念俳句大会

ふすの木
句集

埼玉県立川越高等学校

創立百周年記念
俳句大会

埼玉県立川越高等学校創立百周年記念俳句大会会長

松本 旭

本日は、川越高校創立百周年記念俳句大会を開催するにあたりまして、百周年記念事業実行委員長渋谷健先生、母校の現学校長であられる橋本恭明先生のご臨席をいただき、かくも盛大に「俳句大会」を開けますことは、大変喜ばしく、幸せに存じます。

個人的話で恐縮ですが、私は川中第三十五回の卒業生でありますので、昭和十二年三月までの五年間をここに通学したことになりましたが、当時国語の担当で、東京帝国大学を卒業された飯田亮先生が居られました。川中の野球部に力を入れられた方でもあります。薩摩琵琶の作詞などでも有名な文化人で、国語の授業も熱心で、非常に緻密な指導をいただきました。そのお蔭で私は大変国語に興味を持つことになり、国文学を専攻することになりました。また、生涯の研究テーマに、「連歌・俳諧・俳句の史的研究」を選びましたが、これは川越高校の地と密接な関係をもつ「川越千句」というものがあつたというご縁です。

一四六七年の「応仁の乱」により、京都の公家や連歌師が難を逃れて地方へ落ちのびました。一つは山口の大内氏を頼って西へ、もう一つは東国へ流れて来ました。一四六九年当時の川越城主は道灌の父太田道真でしたが、彼は武のみならず文芸に関心があり、これら連歌師を城内に招いて自分も加わって連歌会を催したのです。長連歌は百句が一巻ですから、連

歌の会を十回も開いて「川越千句」を巻いたわけです。私の研究対象にしている心敬という人物が、そこに招かれているわけです。彼は京都の十住心院の僧都であった人物ですが、その弟子に宗祇という有名な連歌師がおります。この「川越千句」は塙保己一の編纂した「続群書類従」の中に収められていて、川越中学卒業後そのことを学んで、連歌を研究しようということになったわけです。連歌をやるからには俳諧もやる、芭蕉の研究もする、自らも俳句を創るということで、いつの間にか俳句も一所懸命にやるということになった次第です。

川越高校が歴史と伝統ある学校であることは申すまでもありませんが、私にとってはそこで飯田亮先生のご薫陶を得て、その学び舎の地が川越城址であったということが、私の生涯を決めたと言っても過言ではありません。私たちが何処で生まれて何処で育ったか、どういう環境と風土で暮したか、そうしたことが、ひとりの人間の生き方、一人の人生を決めて行くのだとつくづく思います。皆さんも川越高校のOBであり現生徒でもあるし、川越高校にゆかりのある方々ですが、歴史、人間、土地のご縁で文化に関心を持たれ本日一堂に会して記念俳句大会をやらうとお集り下されたと思います。同窓の句仲間として、一日楽しく一緒に過したいと思います。ご挨拶といたします。

埼玉県立川越高等学校創立百周年記念事業実行委員会委員長

渋谷 健

本日は百周年記念大会にお招きいただきまして有難うございました。

百周年の記念事業として多くの方々のご協力で完成いたしました新図書館のこのセミナー室で、記念俳句大会を開くことになりましたことは、大変喜ばしいことでございます。川越高校は伝統として文化芸術の人材育成に力をそそいで参りましたが、百周年記念行事としての音楽会、美術書道展と続いて、その仕上げが、いよいよこの俳句大会であります。文化の薫り高い行事の締め括りとして、こういう意義深い大会を盛大に開いていただいたことをご関係の皆様にご心からお礼申し上げます。

川高も次の一世紀に向かってまた新しい一步を踏み出します。これからも文化の面での心からのご支援をお願いいたしますと存じます。

埼玉県立川越高等学校長
橋本 恭明

本日は百周年記念俳句大会おめでとうございます。教職員をはじめ現役の生徒まで投句を勧め参加を呼びかけていただき誠に有難うございます。

今回の百周年記念行事は、何かと生徒の関わるが多く、生徒も非常によい刺激を受けていて喜ばしいことと存じます。これからもいろいろのことで接触があることと思いますが、ここでこの俳句大会に多少とも関係あることを一つご披露したいと思います。

本校は長らく埼玉県高等学校文化連盟という組織の会長職を仰せ付かつて居りますが、今年には全国総合文化祭が山形で行なわれるため、事前に六月に浦和で種々分科会を行って準備しました。一方今年には文化庁の肝入りで「高校生文芸道場」という大会が新たに開催されました。第一回は神奈川大会ということで、神奈川県近代文学館で行われたのですが、いざれ平成十三年あたりには埼玉大会ということになるでしょう。この神奈川大会は詩歌というポエムのジャンルを中心に行われましたが、これからは俳句、短歌やシナリオ等いろいろのジャンルへ広がると思います。本日お見えの芥川賞作家の奥泉光先生をはじめ諸先輩には文芸の道で名だたる方々がおられますのでこれを機会にお願いがあります。今後芸術を志す生徒がこうした俳句大会に臨んだり、あるいは文芸道場に臨んだりする文化芸術の潮流を末永く育てて欲しいと心からお願ひしたいのであります。

本日の俳句大会が大成功され、皆さんのさらなるご健吟を祈念してご挨拶いたします。

受賞作品

一般の部

実行委員長賞

川越高等学校長賞

県知事賞

県教育長賞

さいたま芸術文化祭賞

さいたま芸術文化祭奨励賞

川越市長賞

水打って影の濃くなる小江戸かな

子燕のこぼるる許り無人駅

楠大樹爽涼の門くぐりけり

夢捨てぬかぎり青春楠若葉

童謡に唄はる小道夏木立

青柿の四角張つたる城下町

秩父路や一斉蜂起の曼珠沙華

小林 幸二

村田 暹

今井 松子

斉木 キミ

加畑 栄

松本 翠

柴崎 富子

在校生の部

実行委員長賞

川越高等学校長賞

県知事賞

県教育長賞

さいたま芸術文化祭賞

さいたま芸術文化祭奨励賞

川越市教育長賞

我が未来ひまわりよりもでかくなれ

炎天下ボール追いかけて恋追いかけて

撫子に母の面影よみがえる

炎天下励まし合つて強くなる

虹出でて近くに行こうとかけだす子

墓参り来年もまた来るからね

涼風に数も英字も子もり歌

石井 康一

金山 秀一

杉田 健児

高橋 秀和

古賀 秀雄

辻村 聡

平山 俊大

松本 旭選

一般の部

特選 曼陀羅図見終つて喰ふ心天

佳作 稲刈るや村に広がる陽の匂ひ

薄荷嚙んで炎昼の歩を継ぎにけり

水打つて影の濃くなる小江戸かな

やはらかき風のぬけ道萩こぼる

弱虫の泣く場所背戸の柿若葉

学生の部

特選 納得の大きな葉を持つ古代蓮

佳作 炎天下ボール追いかけて恋追いかけて

撫子に母の面影よみがえる

札の辻てふ名のみ残して灼くる街

転覆させたし男ばかりの船遊び

買出しに負はれしことも螢の夜

在校生の部

特選 雷に我うたれんと立てる十字架

佳作 夕立に降られて走るラグビー部

我が未来ひまわりよりもでかくなれ

木村 麗水

沢田 清子

斉木 永久

羽生田康雄

杉田 健児

石井 康一

小澤克己選

一般の部

特選 古き世のデザイン切手雁渡る

佳作 稲刈るや村に広がる陽の匂ひ

城址なる母校に秋を惜しみけり

双眸に風をたたんで颯雲

夢捨てぬかぎり青春楠若葉

やはらかき風のぬけ道萩こぼる

在校生の部

特選 我が未来ひまわりよりもでかくなれ

石井 康一

有山 光子

斉木 キミ

市川 英一

柴崎甲武信

松本 辰男

橋本 良子

杉田 健児

松本 辰男

柴崎甲武信

市川 英一

斉木 キミ

有山 光子

石井 康一

肥田埜勝美選

一般の部

特選 水打つて影の濃くなる小江戸かな

佳作 子燕のこぼるる許り無人駅

藤袴わけて秩父の和銅あと

小林 幸二

村田 暹

宮崎 敏昭

内田 徹

松本 辰男

肥田埜恵子

小林 幸二

有山 光子

深見 浩照

渡辺 謙仁

金山 秀一

杉田 健児

特選 古き世のデザイン切手雁渡る

佳作 稲刈るや村に広がる陽の匂ひ

城址なる母校に秋を惜しみけり

双眸に風をたたんで颯雲

夢捨てぬかぎり青春楠若葉

やはらかき風のぬけ道萩こぼる

在校生の部

特選 我が未来ひまわりよりもでかくなれ

石井 康一

有山 光子

斉木 キミ

市川 英一

柴崎甲武信

松本 辰男

橋本 良子

杉田 健児

松本 辰男

柴崎甲武信

市川 英一

斉木 キミ

有山 光子

石井 康一

佳作 くすの木に來し方惜しむ蟬の声

岩田 信之

撫子に母の面影よみがえる

杉田 健児

学生の部

稲妻かノストラダムスカテポドンか

井川 良太

蚊の食ったあの娘の二の腕に発情す

枝川 佳弘

膜処理でアオコの毒は除けるか

渡辺 謙仁

落葉と孤独のカプセル噛みしめる

中村 重治

本阿弥秀雄選

一般の部

特選 蝕了へし月に飛びけり兜虫

斉木 永久

在校生の部

特選 蓮の花ねむけまなこに新しく

梶田 裕磨

奥泉 光選

一般の部

蝕了へし月に飛びけり兜虫

斉木 永久

大楠の玉虫堕ちて蟻喰ふ

田中 秀之

のら猫の来ぬ日もありて夏木立

佐野 京亮

くす大樹頭上に雲の峰聳ゆ

井上 桂一

ふるさとの枕は固し遠蛙

村田 暹



大会投句集

一般の部

花ことば「女性」と聞けり凌霄花
八重咲きの木槿の雲の白さかな
寺庭には白曼珠沙華西日受く

石塚 智恵

秋澄みて校風いまま揺るぎなし

穴澤 光江

双眸に風をたたんで鯛雲

市川 英一

紫の嶺へ羽ばたく雁のこゑ
初雁の城址に仰ぐ秋の月

宙返りして巳む秋の螢かな
紅のアメリカ芙蓉犬吠ゆる

花街の青石畳柿紅葉

阿部 新一

創立百年母校を洗ふ大夕立

井上 桂一

子供らの手に手に香花地藏盆
踊り手の先行く胡弓風の盆

くす大樹頭上に雲の峰聳ゆ
通学の露路そのままに凌霄花

本丸の威容を今に風薫る

新井 治雄

楠大樹爽涼の門くぐりけり

今井 松子

蒼天の雲さはやかに連幟

あかつきの湖蒼し黄鶴鶴

武家屋敷の白壁に映ゆ花菖蒲

沖の鳥見ゆ爽籟の文学館

初雁の城址の月に雲生る

有山 光子

山上に風となりたき大暑かな

内田 徹

やはらかき風のぬけ道萩こぼる

曼陀羅図見終つて喰ふ心天

楠大樹百年凜と天高し

夜の秋少し多めの茶を啜る

一山が噴火してをり峰の雲

安斉 和子

答へなく縁に昼寝の足裏かな

大原 絹子

初恋を終焉とせし敗戦忌

青瓢ささめく括れに風見えて

掃苔や妻の名に添ふ朱の刻字

霧に足奪られ紫紺の鳥兜

梅雨の月の弾くピアノひびきをり

小川 和恵

鯛や奥の座敷に狂言師

落合 好雄

二階より校歌聞こゆる大暑かな
炎塵やラグビーの子ら走り舞ふ

ようお詣り遍路一会の声かわす

奥山 東興

くすの木祭素描

ナマサマシ飯室不動や秋深し

奥山 敬子

砂塵あげ歎声を背に後とんぼ転きる

手花火にしばし浮世を忘れけり

ふうわりと空に鍛練の身をあづく
軽々と友を秋空に投擲す

好天に音立てて引く秋出水

奥山 昌美

黒潮のうち寄する浜敗戦忌

秋天へ筋金入りの樟大樹

片山 茂子

灼熱の関東ローム甘藷育つ

白雁や百年の史に父思ふ

ふるさとのやうな山並雁渡しし

小澤 克己

夏夕じつと立ちをりくすの下

片山 武夫

小鳥来て並木に詩の生まれけり

稲雀飛んで端山に夕日落つ

くす隆々百夏の陽光ひかり呑みこめり
日盛りにくすも奮へり球の音

城跡をとどめし杜や花榭

小鷹 邦夫

風渡る早苗田を背に民話聞く

加藤 健

今年竹すつくと立ちて風薫る

海の香の岩山そびゆ油照

河鹿聞く出湯の里や月明り
蕉翁の句碑読む背中に蝉時雨

百年を祝ぐ合唱虫しぐれ

小高 登

飽食の子らとキャンプす終戦日

加藤 昌孝

楠大樹歴史を秘めて秋空に

激動に月下の楠はたじろがず

碧眼に目で誘はれて踊りの輪
立秋や古武士のごとき人逝けり

童謡に唄はる小道夏木立

加畑 栄

鯨井ひかり

花街の名残留めて水を打つ

夏帽子嫁ぎし娘より届きけり

くすの木の蒼をならして野分立つ
老ゆれども汗し働く姿みす
庭先に赤き苦瓜はじけをり

玉音の脳裏に浮かぶ終戦日

加畑 陽子

栗原 由郎

ありし日の銃剣術や流る汗

百年の歴史を懐く樟若葉

萩匂ひ時はこばれてももとせに
いけよいけ熱球は飛ぶ城址の月
夕映えに仰ぐ大楠時の鐘

引き出しの制服のボタン法師蟬

神山喜美代

桑田 忠男

百年の歴史さやかに樟大樹

百周年門より仰ぐ楠若葉
生きのびて校庭にわに跣足で立ちてみぬ
一期一会百周年の秋澄む日

大樹まで校歌にゆらぐ秋の宴

川合 敬三

小林 幸二

梅薫る校門巖と百年祭

汗にじむ選手の姿球史継ぐ

楠若葉晩学といふ忘れ物
水打つて影の濃くなる小江戸かな
噴水の天を濡らして戻りけり

風涼しロマン探しつ遺跡掘る

岸 智

小谷野美津

炎天下時空越えきし石器出づ

楠の木の木陰涼しき城の跡

躓きて苦笑ひして秋旱
根なし日や愁ひ逃がして夏終る
紅芙蓉逆らふこともしてみたし

夏草や城は空壕だけ残し

木村 麗水

小山 誠三

菓子屋横町駐車場なき秋暑かな

札の辻てふ名のみ残して灼くる街

青葉風鷲とぶ天守見ゆるがに
城趾蕭々とどむべきこと難き秋に
戦は彼岸か梅雨に徴ゆく畳見つ

盆の供華椅子にもたせてイタリアン

近藤千寿子

佐野 京亮

餅供へ背伸びて探すかくれ月

のら猫の来ぬ日もありて夏木立
椋鳥のかたまり生きて昏れにけり
水の面に迅き雲あり秋出水

さんざめく登校の群れ未来の風

蝕了へし月に飛びけり兜虫

齊木 永久

正丸峠や棒切れ取れば穴惑
「赤じゃが」といふ名の恩師雁渡る

沢田 洋々

梯梧咲く島には島の敗戦忌

買出しに負はれしことも螢の夜

鉦叩瘦といふ字にやまひだれ

夢捨てぬかぎり青春楠若葉

齊木 キミ

蓮の実噛む予科練の地なりけり

沢田 清子

長老とならむ気配の白扇

ゆたかなる髪にかざせや百日紅

耳朶の熟れたるさまに花さぼてん
転覆させたし男ばかりの船遊び

百年の校門換えて楠若葉

齊藤 恒

城址なる母校に秋を惜しみけり

柴崎甲武信

青嵐宮の細道通り抜け

遠駆けや蝦蟇仰向けに野辺の道

ふるさとや校歌がつなく大花野
爽籟や校史世紀の楠大樹

採血の血の上りゆく夏さかん

齊藤 弘行

鯿とんで出世のほどを見せにけり

柴崎 富子

とりもどす少女のかたち夏終る

夏羽織やんはり抛る高座かな

秩父路や一斉蜂起の曼珠沙華
桐は実には機音もるる細格子

鯛や大きくすの木も昏れにけり

佐々木 新

指浸し心ひたしぬ秋の湖

柴田 蓉子

ちぎれ雲ちぎれ流るる原爆忌

友を訪ふ病臥の庭の青蜥蜴

右左蝗の発条の充満す
鳥声に出づれば夜の鯛雲

弓技に残暑忘れる道場開き
緊張の射手の間近や赤とんぼ
秋深し昔を語る年令としとなり

島田 公子

雲の峰白装束の娘来る
行く夏や天狗の面の空を向く
湯の町の兜太の句碑の残暑かな

千明 武

槍ヶ岳山行にて

山肌を花と彩るテントの山
U字谷氷河の落とす迷子石
槍の穂を紅く染めゆく御来光

島田 俊一

新涼や学舎百年何の草
秋雲や配属将校孤独たり
濃き闇を棲み分け啼くや秋の虫

中神 定衛

門札は旧師の姓や百日紅
終章に近き読経や百日紅
定刻に花火止みたり人の影

清水 良平

夏鶯別れの近き父とある
パリー祭帽子売場の混み合へり
ブンガワン・ソロ流れてゐたり夾竹桃

長島千枝子

苗取りの息子のほほに初夏の風
霧降りのリフトの下に夏あざみ
三姉妹秋になればと母を看る

宿谷 久江

暮鳴いて神経痛の疼き出す
真近なる辰のめでたさ銀河濃し
早弁の匂ひを外へ夏の窓

中村 誠佑

氷雨降る異国とくにで聞く演歌
滝の音降りつぐ参道一歩づつ
石垣は台風抜けて海開き

関根 憲治

参道の青葉の風や童歌
深緑や木の間とびかふ鳥の声
紫陽花の色合ませり雨の朝

西川 博

大楠の玉虫墮ちて蟻喰らふ
初雁の棄城の月や残り菊
戦さあり甲子園もあり百周年

田中 秀之

鎮魂を告ぐ鐘の音や花木種
タタキ売り喉の奥まで祭の灯
軍艦に似たる島ありいわし雲

野口 元二

開け放ち今年の蟬の鳴きつ振り
頑に妻の酢加減胡瓜もみ
子が急に家系に執す盆休

橋本 和夫

寄せ佛の悲しみ数多合歓の花
螢火の燃えて深まる鄙の闇
弱虫の泣く場所背戸の柿若葉

深見 浩照

秋の瀧未来が透けてくるやうな
学校や樟の大樹の風澄めり
古き世のデザイン切手雁渡る

橋本 良子

秋の草露を照らすは天の華
桃色の奥に坊主が笑つてる
夕立の古城に響く応援歌

福島 佳克

ほんやりと夏も過ぎ逝く萩の寺
百日紅咲き散る風に寺の鐘
金木犀いづこへ散るや茅の寺

畑 喜千松

雲の上月が通るよ花の道

福島梨奈子

三中の旧き表札萩こぼる
初雁の池今やなく雁渡る
片蔭に古き罫の残りけり

日高 武美

ホーホーと托鉢の声吊るし柿
末枯れの巖に大坐す月一つ
夕立の溪谷渡る獅子威し

福田 文彦

鶏のスープ煮つめて妻の大暑かな
灯点れる母校の窓や虫時雨
なつかしく仰ぐ大樟雁渡し

肥田埜勝美

さんざめく校歌斉唱夏座敷
千尋なる師の薫陶よ夏の海
樟若葉夢を支えて百星霜

益子 弘道

梅干して医通ひ延ばしゐたりけり
薄荷噛んで炎昼の歩を継ぎにけり
乙女の押す葡萄畑の猫車

肥田埜恵子

神楽殿に蠅取り蜘蛛の一つ居り
夕晴れや籠一杯の梅香る
郭公のつがひ鳴き交ふ雨の空

松岡 章次

蝉鳴けり黙禱八時十五分

松村 祐二

旧道の茶屋は釘づけ秋の声

宮崎 美子

旧友も旧師も渾名注ぐビール
炎昼や変らぬ校庭変る人

荒壁の蔵や秩父路黍の風
女郎花の風や木椅子に無爲の昼

かぶと虫怒りの角は何に向け

松本 朗

子燕のこぼるる許り無人駅

村田 暹

大西日指の間より射られけり
朝顔の藍あざやかに深みけり

ふるさとの枕は固し遠蛙
秋深し亀が風聴く石の上

露踏めり足汚すことうれしうて

松本 旭

巴里祭かの名画座も今はなく

谷ヶ崎英隆

こけしの唇ほんに小さし出羽南風
威し銃また鳴る風の城下町

雷鳥のスタンプ押して夏見舞
暮れなづむ浅間の翳や合歓の花

雑事繁多葡萄の種の齒に当る

松本 翠

紫陽花の君等を思ひ頬ゆるむ

山梶 恵子

根詰めて真南夕立雲発生
青柿の四角張ったる城下町

百年を一気に越える大樹かな
新涼に目覚めし君の肌の色

稲刈るや村に広がる陽の匂ひ

松本 辰男

星霜を仰ぐ大幹鳥渡る

山田 禮子

ひぐらしや樹海の遼さ計られず
露の原分け入らば草立ちにけり

頬杖の詩人を真似し星月夜
青鷹世紀を越えて羽撃けり

沸きあがる若き喚声天高き

宮崎 敏昭

落語家も踊る卒業予餞会

山崎 孝雄

藤袴わけて秩父の和銅あと
古代蓮咲くや武蔵の鷹場あと

大樟の緑蔭に校門と図書館と
緑蔭やアーチ造りの生徒たち

夏やさい母からとだえ恩を知る
ひまわりと共に咲きだすゴジラくん
台風のつめあと残る浜辺かな

山崎 高子

稲妻かノストラダムスカテポドンか

井川 良太

誰や彼に点す一炷敗戦日

吉村 千秋

過ぎてゆく別れの歌は蝉しぐれ
我が未来ひまわりよりもでかくなれ

石井 康一

花魁めくサンダル履いて娘等が夏
妻子乗せ踏張り在す茄子の馬

若鮎の恨み残せし腸苦し

渡部 温

いい俳句暑くて全然ひらめかない
水泳部シンクロナイズドスイミング
門班の汗と涙でできる門

市坪 次郎

閉店セールあじさい色の傘一本
夜気揺する素振りたのもし甲子園予選

くすの木に來し方惜しむ蝉の声
スタジアム球児に代わって蝉の声
受験生悔いだけのこる夏休み

岩田 信之

在校生の部

更衣ウチは私服で関係ない

赤坂 実朗

ドンドンドンどこでひらく夏火花

岩崎 寛央

いと暑しねるときなんか最悪だ
とろろ汁おれはとろろがきらいだよ

ゴキブリが人の心をゆり動かす
準備時に一瞬でざわめき起こす
電力で虫の命もすぐ消える

植田 康成

わめく蝉短き夏に何思う

赤羽 秀

夏惜しむ金の頭も名残り惜し

枝川 佳弘

八朔やうまいがどうも食べ難し
水馬どこから見てもげんごろう

蚊の食ったあの娘の二の腕に発情す
祭あと飲んだあげくがあの祭

枝川 佳弘

平和な国日本（茶色）

荒川健太郎

秋刀魚と偏差値

走れども霧の途隠し

本当に冬は来るのか長すぎる残暑
たえられない夏の暑さとセミの声
暑き日に必ず求める寒い冬

大室 賢司

ふるさとや真夏の光線ラブマシン
とろろ汁どっちが粘るかがまん汁
髪洗ふ君に見とれてスタンバイ

小池 隼平

今は見ぬ梨柿栗を取る子供

落合 智

虹出でて近くに行こうとかけだす子

古賀 秀雄

月見草三年たてば空に舞い
蓮の花ねむけまなこに新しく

梶田 裕磨

ホームラン稲穂かき分け球拾い
夏休みUV嫌いと今日も長そで

熱低を使って旅した親子熊

加藤 亮

陽は短くなりたり蝉の悲鳴

小林 清貴

今年だけやとときゃよかつた夏惜しむ

もう秋か誰もが驚くピザおじさん

小松 孝

クーラーを止めて初めて暑さを知り
かとう ようへい

おおいに汗をかいて今年ももう半分

「蝻嘶」これが読めたら五千点！
ああ早稲田なぜにお前はああ早稲田
とろろ汁言い得て妙なとろろ汁

この俺を越えてみる入道雲

小柳 貴人

夏の夜に恋を見つけた我が青春

金山 秀一

梨くへばほつりほつりと落ちにけり
くまなきの月を見むとぞ出でにける

炎天下ボール追いかけて恋追いかけて

この夏の受験勉強成果なし

桜井 克

熱し夏私の心もつれてって

神林 祐一

次の日の気温がたかいとまじブルー

昼寝して長く感じる短夜よ

夏風に君と落した恋の火
白球を追いかけて続け甲子園
食べようかいややめようか梨一つ

笹本 知洋

西瓜食うおいしいけれど腹こわす

佐藤 伸

稲びかり明るく光れど中暗し

下川 隆

蜉蝣に負けずはかなき人の世かな
雨上がり滝のひびきに蛍たわむる

瀧澤 俊史

汗たらし進路に迷い俳句書く

眞保 雄介

蝉の命七日のくせにまだ鳴くか
死ぬ間際もうひとふんばり叫べ蝉

田中 雄志

雨の空一人見上げる秋の夜

杉田 健児

夕立に降られて走るラグビー部
撫子に母の面影よみがえる

辻村 聡

秋来るもせみの音色よいつ消える

高木 翼

ミンミンゼミ貴重といえど学の邪魔
受験生秋到来に焦りだす

長島 理史

手袋を付けていこうか立春の朝

高橋 秀和

炎天下励まし合って強くなる
梅雨の日に窓の外見て腕立て伏せ

中村 重治

楠の根元に匂ふ百の薫

高橋 良輔

夏せみやいつのまにやらつくほうし
日のつくる影のびけるが暑さ残り

タカノ マサシ

夏すぎて気持ち萎るが何のせい

夏休み勉強勉強顔真つ白

赤本に打ちのめされた夏休み

夏過ぎてあわてふためき浪人す

すきまから西武ドームで花火みる

蚊の声は暑苦し夜の夢の邪魔

冬近し窓開け放しは風邪をひく

墓参り来年もまた来るからぬ

君と触れて僕の心はふわふわふるる

夏の日には薄着をかきわけクレアモール

覚えても覚えても英単語

とろろ汁手かきたるは我がおかん

読書の秋今年なぜか文に飽き

秋の空を炎が進む世界の終わり

落葉と孤独のカプセル噛みしめる

天の川二人の想いも流されて

中村 圭吾

なくなつた食欲戻すうなぎかな
炎天下花園目指し練習中

中村 慎介

まにあわずただただあせる受験前

羽生田康雄

雨ふれど我らの想い実らせん
雷に我うたれむと立てる十字架

平山 俊大

涼風に数も英字も子もり歌
友の声我が青春はくすの木祭
なすび焼き家までのこり百メートル

夏の夜の最後を飾るくすの木祭

藤本 孝夫

雷おちて灯消える8月

伏原 幹

夏に食う梨のどこかもの悲し
道外れ荒野を進む青蜻蛉

川高やわが誇りなる川高や

武藤 洋善

近きかなされど遠きかな川女や

如月やわが努力を試すときかな

大学の受験勉強あきが来た

矢部 隆大

今さらにこの一夏を悔やむかな
望んでた夏ではあるが早く去れ

雷光がびたりとやます夏の声

山上 哲郎

夕方の夏惜しむ声はひぐらしかな
夏休み昼寝と勉強両立だ

稲妻に犬驚きて丸くなり

吉田 賢一

夕暮れに蟋蟀が鳴く帰り道

吉田 貴史

自転車在必死にこいでプールいく

冷やかな氣に蝉たちの抗える

吉田 遼

祭の音遠く渡り来て我が心騒がす

うしろすがたのしぐれてゆく蚊

蜉蝣の命のような夏休み

依田 崇史

我の身に稲妻落ちし初体育

テキストのうへに浮かぶはかのかたちのみ
ラマン

コオニユリ写真がほけて残念だ

渡部 謙仁

膜処理でアオコの毒は除けるか

納得の大きな葉を持つ古代蓮

漱石の孤独

奥泉 光



久しぶりに母校に来てみての感想ですが、すっかりきれいになっていて、ここが川越高校かという印象が先ずありました。川高は男子校です、率直に言ってそんなにきれいな処ではなかったのですが、今日はすっかり、様変わりなのにびつくりしました。ただ川越の街並は余り変りなく、相変らずの風情が漂っていて、懐かしくもあるし、気が伸びやかになるという感じがします。このリラククスした気持ちで、今日はお話させていただきます。

今日の演題は、漱石の孤独ですが、川高創立百周年俳句大会ということで、俳句に関係したことを話さねばならないのですが、ご存知のように漱石は俳句に造詣の深い作家だったというところで取り上げたわけです。僕自身俳句というものに関心があります。短歌よりもはるかに関心がありますが、それは後刻触れるとして、今日は漱石の孤独という問題を考えてみたいと思います。文学に於ける孤独という問題です。まずいえることは、僕自身小説を書いていて、大変孤独だということ。物を書くのは孤独な仕事である。仕事が孤独であることばかりでなく、小説を書くという行為が孤独を呼び寄せる、孤独でなければ出来ないものだと思うのです。その孤独とはどんなものなのかということを考えていると思うのです。それは多分俳句をつくるということにも、関わっていることと思います。もともと俳句は連句という形

で、複数の人間が一緒に何かを創り出すという時代もあったわけですね、でも近代以降は、俳句を作る作家の意識は孤独なのではないかと思えます。例えば、ある風景を見る、山々をみる、森をみる、そこで俳句を創って行く人間の意識には、ある種の孤独性というものが根本にあると想像されるわけです。

ではその孤独とは一体どういう問題なのか、また漱石にとつては孤独とはどういうものなのかというものを考えたいと思います。今日は、先輩の方々も多く、文学的素養もお有りのことと思えますので、具体的なテキストというか、具体的な漱石の文章を取り上げて、話を進めたいと思います。

さて、この「孤独」ということですが、表現者というものは、大体孤独なものです。近代の表現者は一人で世界に向い合う、自分対世界という構図の中で表現をして行くというのが、近代以降の表現者の特徴だと思えます。近代以前はどうだったのか？ 近代以前は孤独というものは無かったのか？ 近代的意味の孤独というものは無かったのだと思えます。近代以前の社会には、いわば個の確立はなく、個というものが確立してない世界では、根本的意味の孤独というものはないのでないか。但し、文芸の世界では孤独な人達がいるのです。つまり漂泊の遊行芸人とか、古代や中世でもっとも文学を荷った層は、世間から出てしまった人々、いわば社会と社会の隙間、共同体と共同体の隙間を漂泊するような人たちが文芸を荷っていて、そういう人々の中から例えば芭蕉などが登場してきます。芭蕉はよく旅へ出て、世間から離れて、出家するよくな型で世間と向い合う、そういう形でむしろ孤独をつくり出してゆく、もちろん無理矢理に孤独にされて行くということもあり得ます。

近代ではどうか。ヨーロッパでは、個人を描くことが、近代小説の特色です。近代以前の文学が必ずしも個人を描くものでなく、英雄を描く

とか、神話的なものを描くとか、物語を紡ぎ出すというのが、古代、中世の文学の特徴であるとすれば、近代は個人を描く、個人の具体的姿を描くという、これがいわゆる自然主義なのですね。この場合、ヨーロッパでは個人は一人では存在していない、一人になれば個人になれるというものでもない。つまり社会の中で複数の個人が、関係を結び合うような社会、理念的に言えば市民社会、そういう社会があつて、はじめて個人が登場出来る。ヨーロッパではそういう個人が登場したわけです。その個人の姿をありのままに描くのだということで、エミール・ゾラなどがこれを提唱した。それがきわめておどろばに言えばヨーロッパの自然主義的小説なのです。

日本でも明治時代になつて同じようなことをしようとして、近代小説を創るのに先輩達は苦勞したわけです。ところが困つたことには日本には近代的な個人^がが存在しないわけです。いつてみれば村社会が複数あるだけで、ヨーロッパのように、他人がいて自分がいる、他人と関係するような個人というものが、日本には存在しなかつた。そういう中で「個人」をどうやつてつくるかが、文学の課題であつたわけです。小説の中で個人を描こうとした時、現実には個人のない世界で個人を描かねばならない、そんなことが大体出来るのか？そこで作家は取り敢えず自分が個人になろうとした。「個人的に個人になる」、自分一人が個人になる。それは本来は無理なことです。一人きりになれば個人になれないというものはありません。個人になるためには他者がいなければならぬ。他人と関係を結び合えないと個人にはなれない。だから仕方なく日本の近代小説作家達は、言つてみれば社会からの突出を試みたわけです。田山花袋などは独自の思想を持つということとで突出を実現した。それまで日本にあつた因襲とかッしがらみの世界から一人だけ、ポンと出てしまい、抜け出して自由思想を持つ。自由恋愛とかを掲げ、社会

から突出した形で個性をもつという「勝手に個人」。それは本当の意味での個人とは言えませんが、取り敢えず孤独にはなれてしまふわけです。社会から飛び出る、抜け出る個人性——これが日本の近代小説の特徴だと言えます。それが後のご存知の私小説に繋がつて行きます。だから近代小説作家というのは存在そのものがスキャンダラスなのです。つまり世間でいうしがらみとか規則を勝手に破つてしまふ。作家本人が破つてしまふ。例えば次から次へと女性を取り替えるようなことをして、取り敢えず個人になろうとする。その姿をありのままに書く。こういう風な表現の形が、日本の自然主義の出発点にあつたのです。これが実は今の小説の世界にも引き続いて一つの伝統だと思ひます。従つて社会的作家や詩人の基本的意識だと思ひます。これがそのまま、古代、中世の漂泊の民の伝統と結びつくわけです。疎外された場所で社会を眺める視線。従つて私小説の主人公は元気がない。元気のいい私小説の主人公はいないので。必ず無力で、社会から離れて力を持ち得ない。個人ありのままを描くというなら、毎晩料亭で肉を食べ、朝からニンニクを食べて元気のいい人がいてもいいが何故かいない。家族から離れて、しがらみを切つて居るから孤独になり得ている。そのくせ家族のしがらみに如何に苦勞をしたかを嘆く。それならば努力して家族のもとへもどればいいのであるのにそれはしない。それは切り離されたことによつて表現が可能になつてゐるからです。そういう意識のもとに書かれる孤独の意識の位相というものが続いて来た。ここまでが今日の話の前提です。

ところが漱石は違ふのです。ここが漱石という作家の注目に価するところで。漱石自身が孤独の人だといわれますが、とりわけ彼の孤独を決定づけたのはロンドン留学ですね。「ロンドンで夏目は病氣になつた」と友人たちのあいだに噂が流れる。彼の実生活にはたしかに孤独の影が

あった。彼の過去には、幼少期に養子に出され、養父を実父と想っていたが、あるとき、養父だということ知らされるとか、その養父に後に金銭を求められるとか、漱石にはそうした経験が沢山ある。しかし私が注目するのは漱石の小説の中に出てくる独特の孤独性なのです。先に述べた大方の自然主義の作家、あるいは今の作家もそうですが、いわば世間から抜け出したことよって得た孤独ですが、その孤独というのは、孤独のように見えて孤独ではないのですね。つまり思想とかを棄ててしまえばまた元に戻れるのです。元に戻って安定も出来る。そしてまた外に出てみようかなと、『出入自由な孤独』です。しかし漱石の孤独というのは全く質を異にしていると思います。

それでは漱石の孤独とはどういう孤独なのか、結論から先に言えば、コミュニケーションに失敗した者の孤独なのです。漱石の小説に登場する人物は決して特異な思想をもった人間ではありません。例えば「ころ」に、先生という最後に自殺してしまう人物がでてきます。「私」の学生が先生と関係を持つとする、一所懸命付き合う。興味を引かれて近づこうとする。ところが先生はそれを認めない。僕とは深く付き合っではいけない。学生が感じるのは先生という人物の深い孤独なのです。では先生は特別の思想の持ち主かというそうではない。例えば田山花袋の「蒲団」の主人公は、当時世間から受け容れられないような思想の持ち主で、極端な思想を持つゆえの（あるいは思想に身体がついていない者の）孤独性があったが、「ころ」の先生は極端な考えなど持たぬ普通の人です。普通の人なのに何故あんなに孤独なのかは、実は最後の手紙で語られるわけです。先生の孤独には過去に原因があるわけですね。先生という人物は伯父さんに裏切られるという決定的な傷を負っているのです。両親が死んでしまったとき伯父さんを頼りにしたのに彼に財産をとられてしまうわけです。そこから先生の人間不信が始ってくる。

そして、下宿でKという人物と下宿の娘を巡る三角関係の中で、Kと娘と自分との恋愛関係の中で、人間と人間との関係を破壊してしまうわけです。

先生の孤独は人間関係の齟齬が原因です。関係を人との間に結ぶことが出来なかつた失敗にあつたのです。その結果陥る孤独。ヨーロッパの小説ではよく書かれていますが、日本では珍しい。日本の私小説は自ら関係から離れた安全な孤独ですが、漱石の書く孤独はずっと悲惨です。関係を結びたいのに結べない孤独、これが漱石という作家の小説の世界の根底にある孤独ではないかと思えます。

例えば「吾輩は猫である」。僕はこの小説が大変好きでして、何しろ自ら「吾輩は猫である」殺人事件」という文体模写の千枚程の小説を書いていまして、僕はこの小説に大変詳しいのです。日本で一番詳しいでしょう（笑）。隅から隅まで何十回と読んでいませんと、あんなパロディは書けない。それで、この小説を読んでみて、皆さん、猫をどう思われますか？ この小説の冒頭一行目はこう書かれています。

「吾輩は猫である。名前はまだ無い。
どこで生れたか頓と見当がつかぬ。」

これだけではどうということもないが、ずっと読み進むと、主人公の猫の孤独が読めば読む程際立って来る。最初のうちは猫は近所の猫、三毛子とか車屋の黒とか猫仲間が居て、三毛子には淡い恋心を寄せたりしているのですが、第二章になると猫たちが死んだり消えてしまします。三章以降は仲間の猫が小説に出て来なくなる。名前のない猫以外は小説に登場しなくなる。三毛子も第二章で死にます。三章の冒頭にこう書いてあります。「三毛子は死ぬ、黒は相手にならず、聊か寂寞の感はあるが、幸い人間に知己が出来たので左程退屈とも思わぬ。先達は主人の許へ吾輩の写真を……」と書いてあります。つまり猫は仲間の猫がいなくなっ

でも淋しくないのだ。何故ならば人間がいるからだと言っているが、人間の方は猫は猫だと思っているのですね。この小説の構造上、猫は人間の言葉が判るのでこのような語り口になっている。後半になると猫は主人が頭の中で何を考えていることまで判ってしまう、つまり超能力を持った猫ですね。ところが人間側はどうかというと、そういう特別の猫だとは誰も思っていない。普通の猫だと思っている。迷亭も観月も多々羅三平もただの猫だと思っている。三平の如きは猫を鍋にするから呉れないかという始末ですね。ここにあるのは明らかでコミユニケーション・ギャップです。人間に知己が出来たと猫が言っていますが、知己とはコミユニケーションが出来た存在を言うのであって、猫が知己といっても、実際は、人間と猫にはコミユニケーションがないわけで、一方的に猫がそういつているだけなんです。この深い孤独。これは漱石のロンドン体験にも大いに関係があると思いますが、つまりここにあるのは不均衡なコミユニケーションなのです。猫は人間のことを判っているが、人間は全く猫を理解していない。ここで際立つ孤独の雰囲気、読めば読むほど猫の孤独のムードが前に出てくる。最終章で、登場人物が出て来て皆がわあわあしゃべる、ふとその話が止むと「火鉢のなかを見れば火はとくの昔から消えて居る」というくだりがあり、ものすごくしみじみした場面ですが、ここの表現は、さすが漱石は俳句を嗜んでいただけのことがあると思います。しのび込んで来る孤独、ここはすごく心を打つものがあります。「吾輩は猫である」のように一見明るい小説であっても漱石の孤独の相が底に見えると思います。このコミユニケーション出来ぬ孤独の相を、漱石はどの小説にも書いているわけです。

もう一つ「明暗」をとり上げてみましょう。明暗は大傑作だと思えますが、この最後の漱石の小説の登場人物は全員孤独です。何げない出来ごとときり起きていないのに、全部コミユニケーションがうまく行かない

という話ばかり書かれています。お延が思っていることが夫に伝わらない、夫がこう思っているのに妻には伝わらない、兄嫁にも伝わらないというふうに、コミユニケーションがあらゆる場所で齟齬をきたしている。そのことだけがあの小説には書かれているのです。人間のコミユニケーションがうまくいかないということが、全編につらぬかれたトーンになっている。それが結果として、登場人物たちの恐ろしいまでの孤独感を伝えてきて、ああいう小説は日本には他にはないと思います。あの緊迫感、人物達が非常に緊張している、何げない話なのに緊迫したムードが漂う小説になっている。それはコミユニケーションが絶えず齟齬をきたしていく場面を繰り返し描いているからです。コミユニケーションをしようとしてうまく行かない人間の孤独、これが明暗を貫く基調だと思います。小説は中途半端で終わっているが、最後の段で、主人公が温泉へ行くと、昔関係があった女性が遇々温泉に来て仕舞うのです。関係あったといっても、ちよつとすれ違っただけのこと、愛し合ったということでもないし、一緒にホテルに行ったということもない、淡い恋とも言えない、ちよつとすれ違った程度の関係なのに、そこへ主人公の奥さんが行く。何も関係のない二人のところへ奥さんがやってくるということだけで、読者はどきどきするのです。ここに奥さんが来たら大変なことが起るのではないかと、読者は緊張するのです。どきどきするような内容がないのにどきどきするのは何故か？そこへ奥さんが登場したら、さらなるコミユニケーションのギャップや齟齬が爆発する予感を持つからです。恐ろしいことが起こる予感があるからです。今でもすでに修復不可能なまでのすれ違いと誤解が生じているのに、ここでさらなる誤解と妄想が起きるのではないかと読者を震え上がらせるのです。そういう意味で、残酷なまでの孤独の相を描いた傑作だと思えます。

今日、力を入れてご紹介しようと思うのは、ご存知の「坊ちゃん」で

す。ここに角川文庫をもって来ていますが、裏表紙の解説にこう書かれています。「江戸ッ子をもって任じる若い教師の坊ちゃんが、その一本気の性格から、偽りに満ちた世界に愛想を尽かす、作品を一貫するものは人間漱石のもって生れた反俗と正義の心に他ならない。ロマチックな稚氣とユーモア、その歯切れのいい表現は爽快さに満ちている」

これは必ずしも間違いではありません。しかし坊ちゃんという小説はよくよく読んでみると、これは非常に淋しい小説なのです。漱石が一貫して持っていた孤独の相がやはり見事にあらわれている。坊ちゃんという小説は饒舌体で書かれていますね。冒頭の一節を読んでみますと、「親讀りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして居る。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りることは出来まい。弱虫やーい」と嘯したからである。小使に負ぶさつて帰つて来た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと言つたから、此の次は抜かさず飛んで見せますと答えた。」と、いい調子ですね。こういう雰囲気で坊ちゃんが語つて行くのですが、坊ちゃんは語り手ですから沢山しゃべっているような気がしますが、よく読んでみると坊ちゃんはあまりしゃべっていないのです。つまり地の部分で語り手として饒舌ではあるが、坊ちゃん誰か他人と会つたときに、坊ちゃんは台詞としてもを言つていません。つまりこれもコミュニケーション・ギャップの小説なのです。実はコミュニケーション・ギャップがどういふ孤独を生み出すかと言うことを、徹底して書いた小説が坊ちゃんだと思います。そこが面白いのだと思います。

例えば、有名な例でいいますと、松山へ着いて宿屋へゆき、いきなり

蒲団部屋に通されてしまいますね、その件はこうです。

「道中をしたら茶代をやるものだと聞いて居た。茶代をやらぬいと粗末に扱われると聞いて居た。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらない行為だろう。みすばらしい服装をして、ズックの革靴と毛縹子の蝙蝠傘を提げているからだろ。田舎者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやろう。おれは是でも学資の余りを三十円程懐に入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円程ある。みんなやつたつて是からは月給を貰うんだから構わない。田舎者はしみたれだから五円もやれば驚ろいて眼を廻すに極つて居る。どうするか見ると澄して顔を洗つて、部屋へ帰つて待つてると、夕べの下女が膳を持つて来た。盆を持つて給仕しながら、やにやにや笑つて居る。失敬な奴だ。顔のなかを御祭りでも通りやしまいし。是でも此の下女の面より余つ程上等だ。飯を済ましてからにしようと思つて居たが、癪に障つたから、中途で五円札を一枚出して、あと是を帳場へ持つて行けと言つたら、下女は変な顔をして居た。夫から飯を済ましてすぐ学校へ出懸けた。靴は磨いてなかつた。」

五円をチップでやつちやうわけです。当時の五円は今の五万円位でしょうか？ いきなりチップ五万円を渡したわけです。こういう行為はコミュニケーション・ギャップの典型なのです。つまり金銭の不均衡なやりとり程人間関係に齟齬をきたすものはない。「五万円のチップ」を出した坊ちゃんが学校から帰つてくると、むちゃくちゃに待遇がよくなるのです。広い次の間付きの部屋に通されるわけです。普通だったら坦々と旅館へ泊まればよいのですが、五円という極端な額を出した坊ちゃんに、コミュニケーション・ギャップが予感されるわけですね。

さてそれから、坊ちゃんは松山中学へ行くのです。今直感的に思つたのですが、松山中学はどこか、川高に似ていますね。のんびりしてい

るところでしょうか。男子高校であることも含めて、昔の旧制中学だからでしょうか。もしかしたら通じる場所があるかも知れない。

さて、この学校で、坊ちゃんにとって決定的なことがあるんですね。何かというと生徒と言葉が通じないことである。授業になって、江戸っ子弁でべらべらしゃべるものだから。たとえばこういうシーンがあるんですね。

「こんな田舎者に弱味を見せると癖になると思ったから、なるべく大きな声をして、少し巻き舌で講釋してやった。最初のうちは生徒も煙に捲かれてぼんやりして居たから、それ見ると益々得意になって、べらんめい調を用いていたら、一番前の列の真中に居た、一番強そうな奴がいきなり起立して先生と言う。それ来たと思いつながら、何だと聞いたたら、「あまり早うて分らんけれ、もちつと、ゆるゆる遣つて、おくれんかな、もし」と言った」

つまり、坊ちゃんの授業は生徒に通じない。早口で江戸っ子弁でしゃべるから。

「おくれんかなもしは生温い言葉だ。早過ぎるなら、ゆっくり言つてやるが、おれは江戸っ子だから君等の言葉は使へない。分らなければ、分る迄待つてるがいいと答へてやった。」

つまりね、コミュニケーションができないんですよ。もつと典型的な事件は宿直した時のバツタ事件です。坊ちゃんが宿直していると、生徒がいたずらをし、カヤの中にバツタを入れるんです。坊ちゃんは怒る。何て言うかというと

「おれは早速寄宿生と三人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て来た。六人だろうが十人だろうが構うものか。寝巻の儘腕まくりをして談判を始めた。」

「なんでバツタなんか、おれの床の中に入れた。「バツタた何ぞな」と真

先の一人が言った。やに落ち附いて居やがる。此学校じゃ校長ばかりじゃない、生徒迄曲がりくねった言葉を使うんだらう。」

川越高校の校長先生はそうじゃあないと思うけど（笑）。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と言ったが、生憎掃き出して仕舞つて一匹も居ない。又小使を呼んで、「さっきのバツタを持つてこい」と言つたら、「もの掃溜へ棄ててしまいました、拾つて参りましょうか」と聞いた。「うんすぐ拾つて来い」と言うとお使は急いで駆け出したが、やがて半紙の上へ十匹許り載せて来て、「どうも御気の毒ですが、生憎夜では是丈しか見当りません。あしたになりましたらもつと拾つて参ります」と言う。小使迄馬鹿だ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタた是だ、大きなつう體をして、バツタを知らないた、何の事だ」と言う、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりやイナゴぞな、もし」と……」

つまり言葉が違つて居るんですね。坊ちゃんはバツタといつて居るのに生徒に蝗といつて居る、つまり違う言葉を使つていて完全なコミュニケーションがとれていないのですね。早い話が坊ちゃんは生徒との関係がうまくいってないですね、というより大体坊ちゃんがこの学校にどの位の期間いたと思います？ 一ヶ月位の短期間で、あつという間に来てあつという間にいなくなつたのだから、生徒との深い関係をもつことはまるでなかつたわけですね。

有名なエピソードですが、坊ちゃんがてんぶら屋でてんぶらうどんを食べた翌日学校の黒板に「てんぶらうどん二杯は食へ過ぎだ」と書いてあるんですね。風呂へ行つた次の日「風呂で泳ぐべらかず」と書いてある。

坊ちゃんは「田舎者はヒキョーだ」といつて居る。でも生徒の側になつてみればそんなに悪いいたずらではないですよ。バツタはともかく、

てんぶらうどん二杯はたべすぎと書かれた。それ位どうということないのですが坊ちゃんも過剰に反応しているのです。生徒との関係は中々うまくいかない。

では、同僚の先生とはどうなのか。同僚の先生とは全然よくないですね。山嵐とは最後は一緒になって赤シャツをやっつけたりするんですが、では彼とのあいだにたしか人間関係は生まれたのか。

小説の最後の部分でこう書かれている。

「其の夜おれと山嵐は此の不浄な地を離れた。船が岸を去れば去る程いい心持ちがした。神戸から東京迄は直行で新橋へ着いた時は漸く娑婆へ出た様な気がした。山嵐とはすぐ分かれたぎり今日まで逢う機会がない。」

共闘してきた山嵐とはその後会っていないんです。

なぜなのか。漱石はこのフレーズを意図的に書いています。たとえば、こうして、川越高校百周年記念大会があつて師弟ともども皆んな集まるとするじゃないですか。そのときに坊ちゃんは来ないんです。松山高校百周年記念大会があつても坊ちゃんは来ない。彼はその場所にかかわっていないんです。

ところが、山嵐は来る、赤シャツは来る。そう想像してみるとリアリティーがありますね。赤シャツは山嵐と対立しているといっても、同じ土俵にいる。ところが、坊ちゃんは同じ土俵にあげられていないのです。

山嵐と対立した時も、赤シャツと対立したときもそうだけれど、坊ちゃんは同じ土俵に立つことができない。赤シャツも山嵐も何年か経って旧交を暖めることができるかもしれない。しかし坊ちゃんは無理なんです。同じ土俵で議論することは赤シャツ、山嵐にはできるが、坊ちゃんにはできないんです。

こういうシーンがあります。面白いんです。赤シャツから給料を上げ

てやると坊ちゃんは言われるんです。ところが、下宿に帰ると、下宿のかみさんが古河先生が九州の方へ飛ばされちゃうと言う。「その金が余るから、そのお金で坊ちゃんの給料を上げるんだ」と聞かされる。坊ちゃんはカッとなって教頭のところへ押し掛ける。

「小倉の袴をつけて又出掛けた。大きな玄關へ突っ立って頼むと言うと、又例の弟が取次に出て来た。」

例の弟って分りますか。小説には三回しか出てこない。赤シャツの弟は目立たないけれど、すごい。山嵐と坊ちゃんが喧嘩に巻き込まれた時に連絡にくるのがこの男です。「坊ちゃん」では脇役が光っている。こういう小説は日本では少ないですね。

先を続けて読むと

「おれの顔を見てまた来たかと言う眼附をした。用があれば二度だって三度だつて来る。よる夜なかだつて叩き起こさないと限らない。教頭の所へ御機嫌伺にくる様なおれと見損なつてるか。是でも月給が入らないから返しに来たんだ。」しばらくして赤シャツが玄關へ出て来たので

「さつき僕の月給をあげてやると言う御詣でしたが、少し考えが変わつたから断りに来たんです」(中略)「あの時承知したのは古賀君が自分の希望で転任すると言う話でしたからで……」すると赤シャツは

「古賀君は全く自分の希望で転任すると言う話でしたからで……」さらに赤シャツは、

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじゃないんです。ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです。」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から聞いたんじゃないやありません」

「じゃ誰から御聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんの御母さんから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう言ったのですね。」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違うでしょう。あなたの御しやる通りだと、下宿屋の婆さんの言う事は信ずるが、教頭の言う事は信じないと言う様に聞こえるが、そう言う意味に解釈して差し支えないでしょうか」

教頭は頭が良い、というより、これが普通ですね。そして

「おれは一寸困った。文学士なんてものは矢つ張りえらいもんだ。妙な所へこだわって、ねちねち押し寄せてくる。(中略)「あなたの言う事は本当かも知れないですが——とにかく増給は御免蒙ります」

「それは益々可笑しい。今君がわざわざ御出でに成ったのは増俸を受けるとは忍びない理由を見出したからの様に聞こえたが、其の理由が僕の説明で取り去られたにも関わらず増俸を否まれるのは少し解しかねる様ですね。」

「解しかねるかも知れませんがね。とに角断りますよ」

「そんなに否ならか強でてと迄は言いませんが、そう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹変しちや、将来君の信用にかかわる」

「かかわつても構わないです」

「そんな事はない筈です。人間に信用程大切なものはありませんよ。よしんば今一步譲って、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでも宜しい。下宿の婆さんが君に話した事を事実とした所で、君の増給は古賀君の所得を削って得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。其代りがくる。其代りが古賀君よりも多少低給で来て

くれる。其の剰余を君に廻すと言うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はない筈です。古賀君は延岡で只今より栄進される、新任者は最初からの約束で安くくる。それで君が上がられれば、是程都合のいい事はないと思うですがね。」

実に筋が通っているのです。つまり常識ですね。ところが坊ちゃんには「人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。」と言つて後は捨て台詞です。「あなたの言う事は尤もですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ断ります。考へたつて同じ事です。左様なら」と言いつて帰つてゆくのです。まったくコミュニケーションが出来てくあらわれている。彼は孤独な人物なのです。

さて、赤シャツの陰謀で九州へ飛ばされる古賀先生の送別会の場面では、いよいよ坊ちゃんの性格がでてきます。赤シャツが送別の辞を述べて「席に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がったから、おれは嬉しかつたので、思わず手をばちばちと拍つた。すると狸を初め一同が悉くおれの方を見たには少々困つた。山嵐は何を言うかと思つと只今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が一日も早く当地を去られるのを希望して居ります。延岡は僻遠の地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだろう。が、聞く所によれば風俗の頗る淳朴な所で、職員生徒悉く上代樸直の気風を帯びて居るそうである。心にもない御世事を振り蒔いたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君の如き温良篤厚の士は必ず其の地方一般の歓迎を受けられるに相違ない。我輩は大いに古賀君の為に此の転任を祝するのである。(中略)。えへんえへんと二つばかり大きな咳払いをして席に着いた。おれは今度も手を叩こうと思つたが、又みんながおれの面を見るといやだから、やめにし

て置いた。」

宴闌になつて一時間程するうちに席も大分乱れて来た頃、坊ちゃんの退屈したところへ山嵐が来た場面です。庭をみていると山嵐が来て、「どうだ最新の演説はうまかつたろう。と大分得意である。「大賛成だが一ヶ所気に入らないと抗議を申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥れる様なハイカラ野郎は延岡に居らないから……と君は言つたらう」

「うん」

「ハイカラ野郎丈では不足だよ」

「じゃ何と言うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師のイカサマ師の、猫っ被りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも言う方がいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大変沢山知つてる。それで演説が出来ないのは不思議だ」これは坊ちゃんに対する痛烈な皮肉の部分です。ところが「なにこれは喧嘩のときに使おうと思つて、用心の為に取つて置く言葉さ。演説となつちや、こうは出ない」と、言つてしまふ。

「そうかな、然しべらべら出るぜ。もう一遍やつて見給え」

「何遍でもやるさ、い、か。——ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の……」

と、坊ちゃんは、江戸っ子の啖呵は切れるが、面と向つて筋の通つたことが言えないのですね。このセリフさえ、教頭と面と向つては言えないのです。

赤シャツと山嵐の対決にまき込まれて、小説は大詰めを迎えます。赤シャツと野だいが角屋から出るのをつけて、乱闘になる場面です。

「はやての様に後ろから追い附いた。何が来たかと驚いて振り向く奴を待てと言つて肩に手をかけた。野だは狼狽の気味で逃げ出そうと言う気色だったから、おれが前へ廻つて行手を塞いで仕舞つた。

「教頭の職をもつてるものが何で角屋へ行つて泊まつた」と山嵐はすぐ詰りつけた。

「教頭は角屋へ泊まつて悪いという規則がありますか」赤シャツは依然として丁寧な言葉を使つてる。顔の色は少々蒼い。

「取締上不都合だから、蕎麦屋や団子屋へさえ這入つて行かんと、言う位謹慎な人が、なぜ芸者と一所に宿屋へ泊まり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出さうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊ちゃんた何だ」と怒鳴り附けたら「いえ君の事を言つたんじゃありません、全くないんです」と鉄面に言訳がましい事をぬかした。おれは此時氣がついて見たら両手で自分の袂を握つてる。追つかける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やつと言いながら、野だの面へ叩き附けた。(中略)野だは顔中黄色になつた。おれが玉子をたたきつけて居るうち、山嵐と赤シャツはまだ談判中である。

「芸者を連れて僕が宿屋へ泊まつたと言う証拠がありますか」

「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へ這入つたのを見て言う事だ。胡魔化せるものか」

「胡魔化す必要はない。僕は吉川君と二人で泊まつたのである。芸者が宵に這入らうが、這入るまいが、僕の知つた事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳骨を食らはした。赤シャツはよろよろしたが「是は乱暴だ、狼藉である。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」

真向から論理で話が出来ず、暴力沙汰になつて行きます。言葉でコミユニケーションがとれず腕力に訴える。これは明らかに敗北なのですが、

喧嘩の終りは、捨て台詞です。

「おれは逃げも隠れもせん。今夜五時迄は浜の港屋に居る。用があるなら巡查なりなんなり、よこせ」と山嵐が言うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待ってるから警察へ訴えたければ、勝手に訴えろ」と言つて、二人してすたすたあるき出した。」

何と坊ちゃんは、山嵐の台詞を繰り返しただけです。漱石はここで、主人公を言葉による人とのコミュニケーションの出来ない人物として徹底的に描き出しています。坊ちゃんには言葉がない。言葉をかける形で他者とコミュニケーションをとれる人間でないということを強調している。

だからこそ、清が光ります。東京で別れて来た清からの便りを、心待ちにしていた坊ちゃんへ、待望の手紙が届いた場面です。

「夫から二三日して学校から帰ると御婆さんがにこにこして、へあ御待遠さま。やつと参りました。と一本の手紙を持って来てゆっくり御覧と言つて出て行つた。取り上げて見ると清からの便りだ。(中略)開いて見ると、非常に長いもんだ。坊ちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思つたが、生憎風邪を引いて一週間許り寝て居たものだから、つい遅くなって済まない。其上今時の御嬢さんの様に読み書きが達者でないものだから、こんなまづい字でも、書くのに余つ程骨が折れる。甥に代筆を頼もうと思つたが、折角あげるのに自分でかかなくっちゃ、坊ちゃんに済まないと思つてわざわざ下がきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、是でも一生懸命にかいたのだから、どうぞ仕舞い迄読んでくれ。と言う冒頭の四尺ばかり何やらかやら認めてある。成程読みにくい。字がまづい計りではない、大抵平仮名だから、どこで切れてどこで始まるのだから句読をつけるのに余つ程骨が折れる。おれは

焦つ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は五円やるから読んでくれと頼まれても断るのだが、此時ばかりは真面目になって、始めから終い迄読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつかないから、又頭から読み直して見た。部屋のかなは少し暗くなつて、前の時より見にくくなつてから、とうとう縁鼻へ出て腰をかけながら丁寧に拝見した。すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、仕舞いぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴つて、手を放すと、向うの生垣迄飛んで行きそうだ。」この小説で美しいシーンの唯一のものでしよう。彼の背中が見えますね。「おれはそんな事には構つて居られない。坊ちゃんは竹を割つた様な気性だが、只癩癪が強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗に渾名なんかつけるのは人に恨まれるもことになるから、矢鱈に使つちやいけない。もしつけたら、清丈に手紙で知らせる。——田舎者は人がわるそうだから、気をつけて苛い目に遭はない様にしろ。——氣候だつて東京より不純に極まつてるから、寝冷をして風邪を引いてはいけない。坊ちゃんの手紙はあまり短か過ぎ、容子がよくわからないから、此次には責めて此手紙の半分暗い長さを書いてくれ。(中略)

おれが縁鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込んで居ると、しきりの襖をあけて、萩野の御婆さんが晚めしを持ってきた。まだ見て御出ることかなもし。えつほど長い御手紙じやなし、と言つたから、ええ大事な手紙だから風邪に吹かしては見、吹かしては見るんだと自分でも要領を得ない返事をして膳についた。」

清の情愛あふるる長い手紙を読んで考え込んでる姿に、しみじみと坊ちゃんの孤独が際立ちます。

唯一清だけが清という存在だけが言葉なく坊ちゃんを理解してくれ

る。言葉なしに理解してくれる。これはコミュニケーションとは言えませんが。だって清は最初から坊ちゃんを愛している。いわば無償の愛、無垢の愛が、坊ちゃんを支えている。清がいなくなってしまうたら坊ちゃんには何があるのでしょうか？ それは恐ろしいまでの孤独です。坊ちゃんは漱石の二番目の小説ですが、このコミュニケーションの不可能にされた孤独をどの小説のなかでも中心に据えているわけです。その最後の輝きが「明暗」だと思います。明暗に於いても決定にコミュニケーションのとれない孤独な人間達の姿を書いています。何度もいうようですが、日本の小説でこういう孤独の相を書いた作家は殆どいないと思います。人間関係の中で失敗する、関係が困難に落ち入る、関係できないであるが故の孤独の相、これが漱石における最大の特徴であり、漱石の魅力であり、また小説としての面白さの根拠であると感しているわけです。そこで坊ちゃんの小説の極めて有名な最後の部分を読んでみましょう。

「其夜おれと山嵐は此不浄な地を離れた。船が岸に去れば去る程いい心持ちがした。神戸から東京迄は直行で新橋に着いた時は、漸く娑婆へ出た様な気がした。山嵐とはすぐ分れたがり今日逢う機会がない。」で小説が終るかなと思うと続いて「清の事を話すのを忘れて居た。」と。清のことを忘れている筈なのに、忘れていたといつて続く。「——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞆を提げた儘、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊ちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙をばたばたと落した。おれも余り嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと言った。」

其後ある人の周旋で街鐵の技手になった。月給は二十五円で、家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくとも至極満足の様子であったが気の毒な事に今年の二月肺炎を罹って死んで仕舞った。死ぬ前日おれを呼んで坊ちゃん後生だから清が死んだら、坊ちゃんの御寺へ埋めて下さい。

御墓のなかで坊ちゃんの来るのを楽しみに待つて居りますと言った。だから清の墓は小日向の養源寺にある。」というのが結びであります。つまり清は死んで仕舞う、この最後までいいところですね。ここでいわば坊ちゃんという人物の持つ孤独の相が完結し完成するのです。ではこの後の坊ちゃんはどういう人生を送ったかというのは、想像できないけれど、ある意味で漱石はその後の小説で追いつけていると言つてもよいと思います。坊ちゃんと同じタイプではないですが「それから」であり「門」であり「ころ」であり「道草」であり「明暗」であります。どの小説をとつてもやはり、人間と人間が関係を結ぶがゆえに落入つてしまふ孤独を、漱石は追い続けたのではないか。そこが漱石の小説の面白ところであると、強調したいと思います。

多分、俳句というものもそういうところがあるのではないかと思ひます。風景から身を引き離すがゆえの孤独、それが表現を生むというだけでなく、ある事象、人間とは限りませんがその事象に対して関係を持つとうとするがゆえに、それが破綻をきたすときに現れてくる孤独の相、恐らく芭蕉などはそういうものを持つていっているのではないかという直感をもちます。そういう文学の位相を、古代、中世、近世、近代の文芸に発見出来ると思ひます。そして、その孤独の相をもつとも彩やかに表現したのは漱石だと思います。(了)

くすの木会會員自選集

松本 旭 (中35)

菜の花や大鳥通ひの船通る
こけしの唇ほんに小さし出羽南風
国生ミの島か淡路の雁渡る
鳩潜く非業の皇子の死を思へば
出世餅の白が匂ふぞ松の内

肥田登勝美 (中39)

探しものして春の風邪引き直す
干草や戦無き世を馬と祝ぐ
橋上去り難し両岸曼珠沙華
古びたる句集尊び惜命忌
句会へと急がん餅を焦がしけり

中神 定衛 (中41)

門飾り外し光陰動き出す
初音あり五百羅漢の目の動く
滴たされぬ雨の日枇杷の小粒なる
帰郷せぬピアノの主や秋座敷
愛憎の微かに揺れて賀状書く

村田のぼる (中41)

左義長の焰縫り立つ神の域
駅弁の箸は短し山笑ふ
白昼の静かさにあり竹落葉
秋風の来て秋風をふりむけり
己が身の冬陽をなめて眠る猫

小高 登 (中44)

受け継ぎし神事全う小正月
春風にわが農魂は蘇る
胃を失くし十年を生き夏迎ふ

豊作の秋終え秘湯に身を浸す
雪晴れて秩父連山指呼の間

奥山 昌美 (高1)

我も摘む父の好みし山椒の芽
沸点を超えしごとくにの森
戸を開き満月部屋に迎へけり
地方紙に大根包まれ届きけり
まつかな日また一つ落ち年つまる

桑田 忠男 (高1)

伊勢海老跳ねる三方に朱を放ち
黒々と黙の樹幹や花の陰
夏寒し簀があぶり出す狂女
稲雀の渦や川島米どころ
故郷や夜着に母の香日の匂ひ

佐々木 新 (中48)

初燈如来丈六坐しおはす
垂れ落つる夕日四角や北の春
青野尽き風の高さの楢林
パソコンに縄文を訪ふ文化の日
散り紅葉斜陽に独り磨崖仏

柴崎甲武信 (中48)

水の惑星ヒト科の檻の雪女郎
蛙塗ってどの蛙戻る千枚田
蝸牛法王庁を盗聴す
観覧車一灯ごとの狭霧かな
アガサ・クリステイ乗り越してをり暖房車

加藤 昌孝 (高2)

白衣着て尼寺跡の太極拳
飽食の子等とキャンブす終戦日
碧眼に目で誘はれて踊りの輪
ビル街を四角に動く鱒雲

赤とんぼ小さな靴の干してあり
野口 元二 (高2)

初潮のかすかに鳴らす舟の底
花よりもすこし色濃し桜餅
紫陽花の色切る朝の濡鉢
ガラス工房裏手は風の野菊かな
跳ね返る極月の音みな固し

森住 霞人 (高2)

病む妻の声の弱さよ注連飾る
ともかくも病む妻座る松の内
元旦や梢に響ある如く
餅搗の便も届く風の町
熨餅を一晚寝かす客間かな

阿部 新一 (高3)

風光る山懐の湯浴みかな
何もかも五月晴れなり高麗の郷
軒先の触れ合う露地や釣り忍
踊り手の先ゆく胡弓風の盆
潮の香の残れる露地や冬はじめ

小鷹 邦夫 (高3)

初詣雑踏にゐて恵方かな
買初とせり不動尊案内書
奉納と太筆太字筆始め
達磨売り達磨に埋まり声からし
買はずとも値引きぞ楽し達磨市

斉藤 恒 (高3)

齋粥屋敷稻荷に先ず捧げ
鬼やらい鰯に呪文掛けにけり
白木蓮や一寸開けて病みあがり
激安の札ある西瓜買ゐにけり
秋の陽や心の傷の癒えぬ間に

清水 良平 (高3)

元旦や鉄扉閉ざす大使館
象の髯皆こちら向く花疲れ
初産の娘に付きをりて薄暑かな
草虱木椅子に齡委ね切る
鮫鱗を囲む年金貰ふ月

益子 弘道 (高3)

初晴れや仙客一羽湖に立つ
散る花に風情ととのふ古刹かな
岩崩えに突風一陣驟雨来る
雲一つ浮いて秋増す古戦場
奈落めく東尋坊の冬怒濤

松村 祐二 (高3)

白富士を独り占めする蒼き空
風の夜や大根白き湯気の中
摺抜けて苗間どよめく風の足
武者立ちの楠の木涼を包みをり
秋の燈や息災の杯高く挙げ

宮崎 敏昭 (高3)

灼熱の硝子きりりと吹初
菜の花や踊子街道日照雨くる
石走る利根の源流虹たてり
鐘の音や胡麻の花咲く札所みち
寄する浪引く浪明けの浜千鳥

山崎 孝雄 (高3)

初富士や鎮守の杜へ参る道
校庭の隅に落花のつむじ風
学園祭のアーチ大きく雲の峰
誰も居ぬ古寺の小径や萩こぼる
着ぶくれて小さき犬に引かれ行く

松本 辰男 (高3)

初笑米粒ほどの齒が二本
春一番逆しまに川流れけり
蜘蛛の子の糸は見えずに漂へり
祖先みな信士信女や曼珠沙華
をちこちの水を繋ぎて冬の川

沢田 洋々 (高6)

初富士へ靡かぬものなかりけり
麦の芽や将門駆けし野の起伏
艇庫てふ艇庫開けり鳥雲に
飛魚とべり丸い地球を知ることく
学帽を質草として雁のころ

小林 幸二 (高17)

一月や龍太の川の岩襖
草萌る無味乾燥の世界にも
贅沢はこころと時間冷やし酒
竜淵に潜みて水の蒼さかな
懐手捕へてみれば我が身かな

小澤 克己 (高20)

伊勢海老の髭を雲ゆく遠嶺晴
青き踏む身ぬちの発条をなだめつつ
ふいに子の遊びが変はり夏に入る
嬰生まるはるか銀河の端蹴つて
オリオンの真下に熱き稿起こす

安斉 和子

若水と思ふ蛇口をひねりけり
塗装エズボン朱に染め寒明くる
一山を借景として堂涼し
秋天へ厩舎大きく解き放つ
寡黙とは時に逃げ道毛糸編む

大原 絹子

書初に児の活力の溢れけり
通院に立ち寄る御苑梅三分
燃える日の匂ひを反す梅筵
九十九折り貴船へ辿る落葉みち
着ぶかれて同じ毎日厨ごと

金子 敦子

苦も楽もよき果としたし初暦
一度鳴き自重してをり初蛙
薫風や急に展けし九十九折
遠き日の横笛聞きし十三夜
負い籠に冬菜ゆらして婆さま来

小谷野美津

水音のまどかな韻初厨
花筏どつと寄せ来てとのぐもる
うつしよの夏草戦ぐ尼寺の跡
棕鳥や宮の大樹は揺れやまず
冬銀河世紀を越ゆる静寂かな

柴崎 富子

雪女爪の鱗光こぼしけり
幼ならに上座下座や雛の宴
開け放つ土蔵の小窓桐の花
雁鳴くや水尾の結べる江戸小江戸
暖炉の火ゆれて魚拓が泳ぎ出す

島田 栄子

ひかえめの八十路の紅や謡い初
やはらかき夕陽の影や春障子
大空へ花束捧ぐごと火花
雲出でて雲間に入りぬ十三夜
連風の青き大空揺りおり

投句者名簿 (アイウ順)

(一般)

| | | | |
|-------|-----------|-----------------|-------|
| 穴澤 光江 | 〒三五〇〇〇一五 | 川越市今泉一七〇一 | 中三二回妻 |
| 阿部 新一 | 〒三五〇〇〇三五 | 川越市西小仙波町二四一七 | 高三回 |
| 新井 治雄 | 〒三五八〇〇二三 | 入間市扇台五十二 | 高三回 |
| 有山 光子 | 〒三五〇〇一一二四 | 川越市新宿町六一三二一四 | 定高四回妻 |
| 安齊 和子 | 〒三五〇〇一二二三 | 鶴ヶ島市脚折一八三五六六 | 中四一回妻 |
| 市川 英一 | 〒三五〇〇一二二七 | 日高市女影八〇六十三 | 高三三回 |
| 井上 桂一 | 〒三五〇〇一二二三 | 日高市高萩六一六一 | 高一一回 |
| 石塚 智恵 | 〒三五〇〇一二〇六 | 鶴ヶ島市藤金八六八一九 | 高五一回母 |
| 今井 松子 | 〒三五〇〇〇六二 | 川越市元町一〇一一 | 中三九回妻 |
| 内田 徹 | 〒三五五〇〇一二 | 東松山市日吉町二六五 | 高三三回 |
| 大原 絹子 | 〒三五〇〇一二〇四 | 鶴ヶ島市鶴ヶ丘四六九 | 高三一回 |
| 小川 和恵 | 〒三五五〇〇二六 | 東松山市和泉町一三三 | 在校生母 |
| 奥山 東興 | 〒九九九六一〇五 | 山形県最上郡最上町富沢一三七八 | 中二八回 |
| 奥山 昌美 | 〒三六二一〇〇一 | 上尾市上一四八一六 | 高一回 |
| 小澤 克巳 | 〒三三一〇〇四七 | 大宮市指扇二七六七 | 高二〇回 |
| 小鷹 邦夫 | 〒三五〇〇〇三四 | 川越市仙波町三一三四 | 高三回 |
| 小高 登 | 〒三五〇〇一三二 | 比企郡川島町紫竹三 | 中四四回 |
| 落合 好雄 | 〒三五〇〇一二五三 | 日高市大字台二八一 | 高五回 |
| 片山 茂子 | 〒三五〇〇〇五一 | 川越市志多町四五 | 中三回子女 |
| 片山 武夫 | 〒三五〇〇八三八 | 川越市宮元町三九二五 | 高校一〇回 |
| 加藤 健 | 〒三五〇〇〇五三 | 川越市郭町二二一一 | 高三回 |
| 加藤 昌孝 | 〒一八三〇〇四二 | 府中市武蔵台三三四一一 | 高一回 |
| 加畑 栄 | 〒三五〇〇一一二六 | 川越市旭町一一六一四 | 高三回 |
| 加畑 陽子 | 同右 | | 同右妻 |

| | | | |
|-------|-----------|----------------------|-------|
| 川合 敬三 | 〒三五〇〇〇四二 | 川越市中原町二一一 | 高三回 |
| 岸 智 | 〒三五九一一四五 | 所沢市山口二六一六 | 高三回 |
| 木村 麗水 | 〒三五〇〇一二五三 | 日高市台一九三一 中四一回 (加藤英明) | 高一回 |
| 桑田 忠男 | 〒三三〇〇〇一七 | 大宮市風渡野三二四一 | 高一回 |
| 小林 幸一 | 〒三五〇〇〇四六 | 川越市菅原町一六一六 | 高一七回 |
| 小谷野美津 | 〒三五〇〇〇三四 | 川越市仙波町三二〇一四 | 元職員 |
| 小山 誠三 | 〒三五七〇〇四四 | 飯能市川寺六六〇 | 中四七回 |
| 神山喜美代 | 〒三五〇〇〇四五 | 川越市南通町二〇一九 | 高二〇回母 |
| 近藤千寿子 | 〒三五〇〇一五二 | 比企郡川島町上伊草一七八二七 | 在高生母 |
| 齊木 永久 | 〒三五〇〇〇四四 | 川越市通町六九 | 高一二回 |
| 齊木 キミ | 同右 | | 同右妻 |
| 齊藤 恒 | 〒三五〇〇〇五六 | 川越市松江町一一〇六 | 高三回 |
| 齊藤 弘行 | 〒三五〇〇〇八〇四 | 川越市下広谷九三三七 | 高三回 |
| 佐々木 新 | 〒三五〇〇〇四五 | 川越市南通町一五一六 | 中四八回 |
| 佐野 京亮 | 〒二三四〇〇五四 | 横浜市港南区港南台七六三 | 定高三回 |
| 沢田 洋々 | 〒三三八〇八二三 | 浦和市栄和二四一一 | 高六回 |
| 沢田 清子 | 同右 | | 同右妻 |
| 柴崎甲武信 | 〒一五八〇〇九七 | 世田谷区用賀一五一一四 (育久) | 中四八回 |
| 柴崎 富子 | 同右 | | 同右妻 |
| 柴田 蓉子 | 〒三五六〇〇〇四 | 上福岡市上福岡五七八 | 高二六回母 |
| 島田 公子 | 〒三五〇〇二〇六 | 坂戸市中小坂五五〇一 | 在校生母 |
| 清水 良平 | 〒三三六〇〇一一 | 横浜市金沢区長浜二二二二六 | 高三回 |
| 宿谷 久江 | 〒三五〇〇四四五 | 入間郡毛呂山町葛貫六四四 | 在高生母 |
| 関根 憲治 | 〒一七九〇〇八五 | 東京都練馬区早宮一二四一〇 | 高三回 |
| 田中 秀之 | 〒三五〇〇〇三四 | 川越市仙波町二一八一三 | 高三回 |
| 千明 武 | 〒三五〇〇一一九 | 川越市豊田新田一九二一一 高一七回 | 義弟 |
| 中神 定衛 | 〒一八一〇〇〇五 | 三鷹市中原一二二二九 | 中四一回 |
| 長島千枝子 | 〒三五五〇三四二 | 比企郡玉川村玉川一四八二 | 旧職員妻 |
| 中村 誠祐 | 〒三五〇〇一二〇五 | 日高市原宿三八二一七 | 高一一回 |

| | | | |
|--------|----------|-----------------|------------|
| 西川 博 | 〒三五〇〇〇三五 | 川越市西小仙波町一七七一 | 高三回 |
| 野口 元二 | 〒三五〇〇〇三六 | 川越市小仙波町五七上 | 高二回 |
| 橋本 和夫 | 〒三五七〇〇六三 | 飯能市飯能五七一 | 中四二回 |
| 橋本 良子 | 〒三五五〇〇二四 | 比企郡嵐山町志賀二七四一三 | 高九回妻 |
| 畑 喜千松 | 〒一五二〇〇〇二 | 目黒区目黒本町一四一五 | 高三回 |
| 日高 武美 | 〒三五〇〇一二五 | 日高市横子二六八一五 | 高四回 |
| 肥田 楚勝美 | 〒三五九一一四四 | 所沢市西所沢二一〇一八 | 中三九回 |
| 肥田 楚恵子 | 同右 | | 同右妻 |
| 深見 浩照 | 〒三五〇〇二〇六 | 坂戸市中小坂三〇〇 | 定高三回 |
| 福田 文彦 | 〒三三一〇〇六一 | 大宮市西遊馬団地五五〇六 | 高三回 |
| 益子 弘道 | 〒三五〇〇一二六 | 川越市旭町一三二一 | 高三回 |
| 松岡 章次 | 〒三五〇〇〇三一 | 川越市小仙波町一一八 | 高三回 |
| 松村 祐二 | 〒三五〇〇〇六四 | 川越市末広町三二二四 | 高三回 |
| 松本 朗 | 〒三五〇〇〇三四 | 川越市仙波町三二九上三 | 定高三回 |
| 松本 旭 | 〒三六二〇〇三七 | 上尾市上町二二二四 | 中三五回 |
| 松本 翠 | 同右 | | 同右妻 |
| 松本 辰男 | 〒三五〇〇一二六 | 川越市旭町二五二六 | 定高三回 |
| 宮崎 敏昭 | 〒三三〇〇〇八三 | 大宮市中川一四五一〇九 | 高三回 |
| 宮崎 美子 | 同右 | | 同右妻 |
| 村田 暹 | 〒一八三〇〇二七 | 府中市本町二二二五 | 中四一回 |
| 谷ヶ崎英隆 | 〒二三六〇〇五七 | 横浜市区見台六六一四六 | 中四一回加藤英明子息 |
| 山崎 孝雄 | 〒三六九〇一三三 | 北足立郡吹上町前砂二三五五 | 高三回 |
| 山崎 高子 | 〒三五三〇〇〇一 | 志木市下宗岡四一三二八 | 職員妻 |
| 山田 禮子 | 〒三五〇〇一一六 | 川越市南大塚一一六三二一 | 高一八回妻 |
| 吉村 千秋 | 〒三五〇〇一五二 | 比企郡川島村上伊草一七八二一七 | 高一八回妻 |
| 渡部 温 | 〒三五〇〇三二二 | 比企郡鳩山町鳩ヶ丘一八一二 | 在校生父 |

〔教・職員〕

| | | | |
|---------|-------|-------------|-------|
| 柏木 敬子 | 鯨井ひかり | 栗原 由郎 | 島田 俊一 |
| 福島 佳克 | 山梶 恵子 | 福島梨奈子(佳克子女) | |
| 〔在校生〕 | | | |
| 赤坂 実朗 | 赤羽 秀 | 井川 良太 | |
| 岩崎 寛央 | 岩田 信之 | 枝川 佳弘 | |
| かとうようへい | 金山 秀一 | 神林 祐一 | |
| 古賀 秀雄 | 桜井 克 | 佐藤 伸 | |
| 下川 隆 | 眞保 雄介 | タカノマサシ | |
| 瀧澤 俊史 | 田中 雄志 | 長島 理史 | |
| 中村 慎介 | 平山 俊大 | ラマン | |
| 小松 孝 | 荒川健太郎 | 市坪 次郎 | |
| 大室 賢司 | 落合 智 | 梶田 裕磨 | |
| 小柳 貴人 | 笹本 知洋 | 杉田 健児 | |
| 高木 翼 | 中村 圭吾 | 武藤 洋善 | |
| 矢部 隆大 | 山上 哲郎 | 吉田 賢一 | |
| 吉田 遼 | 依田 崇史 | 石井 康一 | |
| 加藤 亮 | 小池 隼平 | 小林 清貴 | |
| 辻村 聡 | 羽生田康雄 | 伏原 幹 | |
| 渡辺 謙仁 | 高橋 良輔 | 吉田 貴史 | |
| 高橋 秀和 | 中村 重治 | 植田 康成 | |
| 藤木 孝夫 | | | |

あとがき

川越高校創立百周年記念俳句大会

実行委員長 柴崎 育久
(俳号 甲武信)

一九九九年十月三十日秋うららの午後、大楠の下新装なった図書館のセミナー室で、本記念俳句大会が和やかに開催できましたことは誠に慶賀に存じます。

橋本恭明川越高等学校長をはじめ、楨田幹夫PTA会長、川西一紘後援会長のご臨席もいただき、かくも盛大にかつ愉快に俳句大会を挙行出来ましたことは、創立百周年記念実行委員会委員長渋谷健氏、同委員会行事部委員長道祖土武氏の手厚いご指導と、さいたま芸術文化祭埼玉県実行委員会の後援のお陰と深く感謝申し上げます。

さて、母校百年の記念事業の一つとして「俳句大会」をやるうと火を点けたのは、半世紀以上も昔の「戦後の青春」であります。敗色濃い昭和二十年七月、国漢教師の佐藤徳四郎先生が、巣鴨学園から都立豊島中学を経て赴任して来られました。戦後はもはや孔孟の教えでもあるまいにという時代に、現代中国文学を白文で示して授業を始めました。ある学年のクラスでは、毎週俳句十句を自作して提出せよと宿題を課せられたりしました。当時先生は、源氏物語や英文旧約聖書の読書会を始めたり、北アルプス裏銀座縦走の登山、写真や映画の鑑賞等文化部の基礎を創って活躍されました。用務員室の上り框で句会を始められたのも戦後直ぐのことです。当時から吉田冬業主宰の俳誌「頼祭」に川中、川高生の俳句が度々掲載され、ときたま特集として数頁を飾ることがありましたが、全て「徳さん」の壮大な仕掛けです。

あれから五十年、あの宿題俳句を強制された高校三回卒業生三十名程が三ヶ月に一回川越福祉センターで句会をやっていることから、この「記念俳句大会」の企画の相談を持ち込み、仕掛花火に火が点いた次第です。母校の百周年記念俳句大会開催の準備も兼ねて「川高くすの木句会」を結成、毎月第一土曜日午後六時に定例会を同窓生の家族を含めて開くことにし、その第一回が平成十年九月六日に開催されました。

幸い大先輩に俳人として俳誌を発行されご活躍の松本旭「橘」主宰、肥田荃勝美「阿吽」主宰が居られ、後輩で地元俳誌「遠嶺」の小澤克己主宰のお知恵も頂いて、俳句に興味のある同窓生やその家族の方々に輪を拡げることが出来ました。お陰様で、同窓生とその家族、PTAとその家族の方々の「一般の部」への投句者は七十九名に及びました。また母校では、国語科の大館義廣先生をはじめ諸先生が、校内に投句箱を設置して生徒全員に投句を呼びかけ、在校生五十二名と職員六名とその子女一名合計五十九名の投句をいただきました。沢山の方々のご参加ご協力誠に有難うございました。

終りに記念事業実行委員会の伊藤事務局長をはじめ、当大会の準備から開催当日の諸雑事を背負ってくれた「川高くすの木句会」の宮崎敏昭幹事長、本誌の表紙に揮毫してくれた松本辰男実行委員をはじめ和氣瀧々の句仲間にも心より御礼申し上げます。また、本誌の編集に寸暇を惜しんで協力していただいた、佐々木新氏、澤田洋々氏また編集から校正印刷まで直接ご指導いただいた高校二回卒の「大和写植」社長岡田良平氏に心よりお礼申し上げます。

また本校百年唯一人の芥川賞作家奥泉光氏には、俳人でもあつた夏目漱石について記念講演をしていただき、本大会に大きな花を添えることが出来ました。誠に有難うございました。

埼玉県立川越高等学校百周年記念俳句大会役員

| | |
|---------|-------------------|
| 大会 会長 | 松本 旭 (俳誌「橘」主宰) |
| 大会 副会長 | 肥田 埜勝美 (俳誌「阿吽」主宰) |
| 実行委員長 | 桑田 忠男 |
| 実行委員 | 柴崎 育久 (甲武信) |
| | 益子 弘道 宮崎 敏昭 |
| | 松本 辰男 沢田 洋司 (洋々) |
| 大会運営委員長 | 小澤 克己 (俳誌「遠嶺」主宰) |
| 総括 | 宮崎 敏昭 |
| 会計 | 野口 元二 |
| 賞品 | 小澤 克己 |
| 表彰状 | 松本 辰男 |
| 垂れ幕・看板 | 同右 |
| 受付 | 小林 幸二・安斉 和子 |
| | 大原 絹子・小谷野美津 |
| 渉外・広報 | 澤田 洋司 |
| 場内管理・連絡 | 小鷹 邦夫 |
| 選句記録 | 小林 幸二・柴崎 富子・金子 敦子 |
| | 片山 茂子・橋本 良子・小澤 徳江 |
| 記録 | |
| 文書 | 佐々木 新 |
| ビデオ | 阿部 新一 |
| カメラ | 柴崎 建治 |
| 録音 | 伊藤 豊 |

川高くすの木句会のご案内

- 一、開催日時 毎月第一土曜日 一時三〇分～五時
- 二、開催場所 川越福祉センター (川越駅西口徒歩七分)
- 三、出句 五句 (当季雑詠、当日投句)
- 四、会費 五百円 (在校生は無料)
- 五、句会 当日出席者の互選
- 六、申込先 宮崎敏昭 (電話〇四八六―八三一五九七六)

埼玉県立川越高等学校
創立百周年記念俳句大会

発行日 二〇〇〇年二月二十二日

発行 埼玉県立川越高等学校

創立百周年記念事業実行委員会

埼玉県川越市郭町二一六

電話 〇四九二(二三)〇三三四

制作 大和写植